

J E C の源流と歴史的遺産 4

宗教改革の三大原理と J E C

一宮基督教研究所 安黒務

古代教会から宗教改革へ

今回は、「三位一体論」や「キリストの神人二性一人格論」といった“あらゆるところで”、“常に”、“すべてによって”信じられてきた「古代教会の正統信仰」、つまり正統的かつ公同的な教理を基本とする J E C についてみました。今回は、中世のローマ・カトリックの時代を背景にして、当初は内部改革として起こりました「16世紀の宗教改革運動¹」と J E C の関係についてみてまいりましょう。

聖書のみ

1521年4月18日、ルターはヴォルムスの国会で聖書に対するみずからの確信を次のように披瀝して注目を浴びました。「私は聖書のあかし、またはその明白な理由から確信せしめられるのでなければ。というのは、私は教皇も宗教会議も信じない。それらはしばしば誤りを犯し、自己矛盾をきたしていることは明らかなことである。私の良心は神のことばに捕らえられている！」当時のカトリック教会において信仰に関する最高の権威は事実上教皇を中心とする教会でした。これに対し、ルターは神のことばである「聖書のみ」が**最高の権威**であると主張したのでした。

「彼ら改革者たちのキリスト教理解の全体は、この“聖書のみ”の原理に依拠していました。すなわち、彼らにとって聖書はこの世界における**唯一の神のことば**であり、個人と教会の**唯一の指導者**であり、真の神とその恵みを知るための**唯一の源泉**であり、過去・現在を通して教会のあかしと教えとをチェックする**唯一の資格ある審判者**でした。」

「聖書+伝承」とするカトリックや「聖書を単に歴史的宗教的文書のひとつ」とみるリベラルな見方に対して、**ルターのような聖書観**は、エバンジェリカルとしての J E C の根本的確信です。

信仰義認

カトリック教会の「**信仰+善行**」の主張によりますと、人間の側の状態いかにによって、義認は変化もし動揺もするということです。このような考え方は、義認の一回的完結性と救いの確かさの喪失に帰着し、カトリックの信仰者は「救いの確信」を持つことはできないといわれています。

かつてルターは次のように言明しました。信仰義認の教理は「すべての教理を支配する主であり王です。」**キリスト教における根本的な問題は**罪人がいかにして神に義と認められ、神との正しい関係に入ることができるかという

ことです。これに対する聖書の一貫した答えは「恵みのみ」ⁱ、「キリストのみ」ⁱⁱ、「信仰のみ」ロマ3:24、ガラ2:16 によるということです。

JECの聖会やキャンプでは、ウォッチマン・ニーの「キリスト者の標準」にある「キリストの血」ⁱⁱⁱのメッセージがよく語られました。姦淫と殺人の罪を犯したダビデが「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。」ロマ4:5-8と告白しましたように、何の働きもない、不敬虔な私たちも、出エジプトの過ぎ越しの時のように、神の子羊なる「キリストの贖いの血」によっておおわれ、罪赦された者なのです。

聖徒の交わりとしての教会

ホッジという神学者は、カトリック教会を「キリストの代理としてのローマ教皇に服従する外形的社会」と言っています。つまり、カトリックの教会観の中心をなしているものは、結局教皇を頂点とする聖職位階制であり、神の民とか信者の集りということはみなそれに従属するものにすぎません。

改革者たちの教会観に共通していたものは、「キリスト者の会衆また集会」としての教会という信仰でした。ルターは、第一に、当時特権的位置を占めていた聖職階級に対して、信仰者はすべて神の御前に祭司であること。第二に、カトリック教会の霊的階級性に対して、信仰者はすべて平等に神に接することができること。第三に、当時の聖俗という優劣の考え方を否定し、靴屋であれ、鍛冶屋であれ、農夫であれ、人間の職業はすべて神より召された職域であること。以上の三つの点を強調しました。

JECは教会政治のあり方として「会衆制」をとっています。エリクソンという神学者は、このあり方は「万人祭司制の教理の実践として最も聖書的である」ⁱⁱⁱと語っています。

宗教改革の子孫としてのJEC

以上、宗教改革の三大原理を概観しました。「聖書のみ」「信仰義認（キリストのみ）」「聖徒の交わりとしての教会（万人祭司）」は、それぞれ客観的・主体的・社会的要素と呼ばれ、それらはプロテスタントの三大原理と見られています。エバンジェリカルとしてのJECは、この三大原理を忠実に継承しているゆえに、宗教改革の子孫なのです。

i 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、pp.68-87

ii ウォッチマン・ニー「キリスト者の標準」いのちのことば社、pp.1-22

iii Millard.J.Erickson, “Introducing Christian Doctrine” Baker, p.345